

戦前期における北海道の製糖工場の社宅街について

-製糖業に関わる建築活動からみた戦前期日本の影響下にあった地域の相互比較に関する研究 その2-

正会員○辻原万規彦^{*1} 同 角 哲^{*2}

同 今村仁美^{*3} 同 安浪夕佳^{*4}

9. 建築歴史・意匠-2. 日本近代建築史 建築歴史・意匠

北海道製糖, 日本甜菜製糖, 明治製糖, 北海道, 甜菜

1. はじめに

本研究は, 旧植民地諸地域を含む日本における製糖工場と社宅街の形成過程を明らかにし, これらを比較することを通して, 当時の建築活動の特質性や相互の同質性を明らかにすることを目的としている¹⁾。

これまでに, 旧南洋群島における南洋興発の製糖工場と社宅街²⁾, 沖縄県の南北大東島における大日本製糖の工場と社宅街(「その1」参照)について報告した。本稿では, これらに引き続き, 北海道における戦前期の製糖工場とその社宅街について報告する。北海道における製糖工場と社宅街については, すでに角の研究³⁾があるが, 2ヶ所の事例を取り上げたのみである。

なお, 本稿では, 当時の用語や呼称をそのまま用い, 引用文などは, 原則として現代仮名遣いに改めた。

2. 戦前期の北海道における製糖業の概要^{4), 5)}

北海道では, 明治13(1880)年に官営紋釐製糖所(後に民営化), 同21年に札幌製糖(株)が設立され, 甜菜を用いた製糖を行ったが, いずれも成績は不振となり, 明治29年には操業を停止した。

その後しばらく, 製糖は行われなかったが, 大正8(1919)年に帝国製糖(株)社長の松方正熊らによって北海道製糖(株)(以下, 北糖)が設立され, 現在の帯広市に工場を建設した。続いて, 大正9年には台南製糖(株)取締役の河井芳太郎らによって日本甜菜製糖(株)が設立され, 現在の清水町に工場を建設した。しかし, 日本甜菜製糖は経営不振となり, 大正12年には明治製糖(株)(以下, 明糖)に吸収合併された。

さらに, 昭和10年には, 北糖が磯分内に, 明糖が士別に工場を建設した。昭和15年に帝国製糖が大日本製糖(株)に吸収合併され, 北糖も大日本製糖系列となったが, 昭和19年には明糖に譲渡され, 北海道興農工業(株)として, 帯広, 磯分内, 士別の工場を持つことになった。一方で, 明糖の清水工場はブタノール工

場に転用されて, 産業設備営団に譲渡され, 終戦を迎えた。戦後は, 昭和22年に日本甜菜製糖(株)と社名を変更し, 清水工場を買い戻した。

3. 戦前期の北海道における製糖工場の社宅街⁵⁾

(1) 北海道製糖帯広工場

帯広工場は, 元晩成社の農場用地(大正村大字売買村)を買収して, 大正9(1920)年2月に着工され, 翌年1月には操業を開始した。工場の設計はアメリカのDyer社であるが, 社宅や福利施設の設計は不明であり⁶⁾, 工場も含めて施工会社についても不明である。

図1に, 昭和23年頃⁷⁾の社宅街の復原図を示す⁸⁾。社宅街は, 社員用の社宅が並ぶ「高台」と作業員用の社宅が並ぶ「下台」に分かれていたが, 共同浴場は両方に設けられた。医務室も工場創立当時から設けられたが, 復原図に示したものではない可能性が高い。

また, 甜菜集荷用に建設した十勝鉄道の開設によって停車場周辺に小市街が発生し, 工場の立地する大字が大正村から分離して川西村となるほどであった⁹⁾。

(2) 明治製糖(旧日本甜菜製糖)清水工場

清水工場は, 明治40(1907)年に開設された省線清水駅前に形成された人舞村清水の市街地に隣接して¹⁰⁾, 大正9(1920)年7月に着工され, 翌年10月に操業を開始した。工場の設計は帯広工場と同様にDyer社である¹¹⁾が, 社宅などの設計や施工は同じく不明である。

図2に, 昭和11年頃の社宅街の復原図を示す。甜菜を集荷するための河西鉄道の線路を境に, 西側に社員用の社宅が, 東側に作業員用の社宅が建てられた。子会社である河西鉄道の社宅や傍系会社で隣接した敷地に工場があった明治製菓(株)の製酪工場の社宅も同じ敷地にあった。詳細な年代は不明だが, 入手できた図面では, 作業員用の社宅には, 寒冷地対策のためか, 炉が設けられていた。2009年9月現在, 創立当時の工場の一部のほか事務所とグラウンドが残っている。

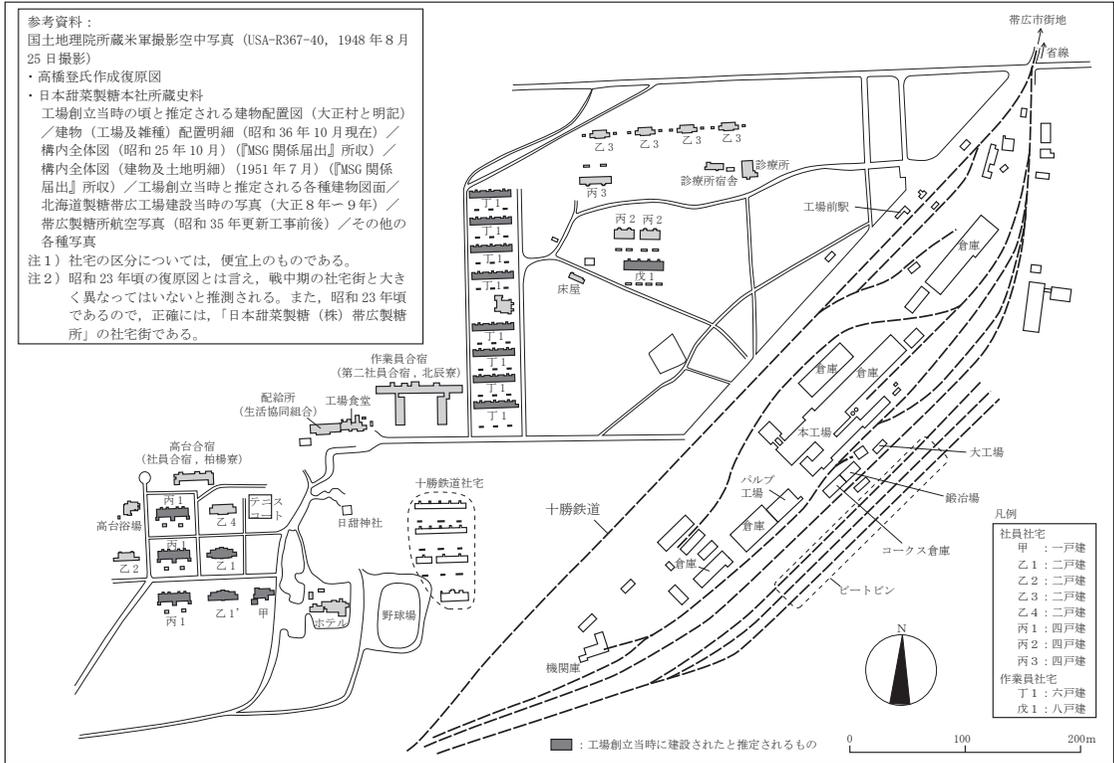


図1 北海道製糖（株）帯広工場の社宅街の復原図（昭和23年頃）

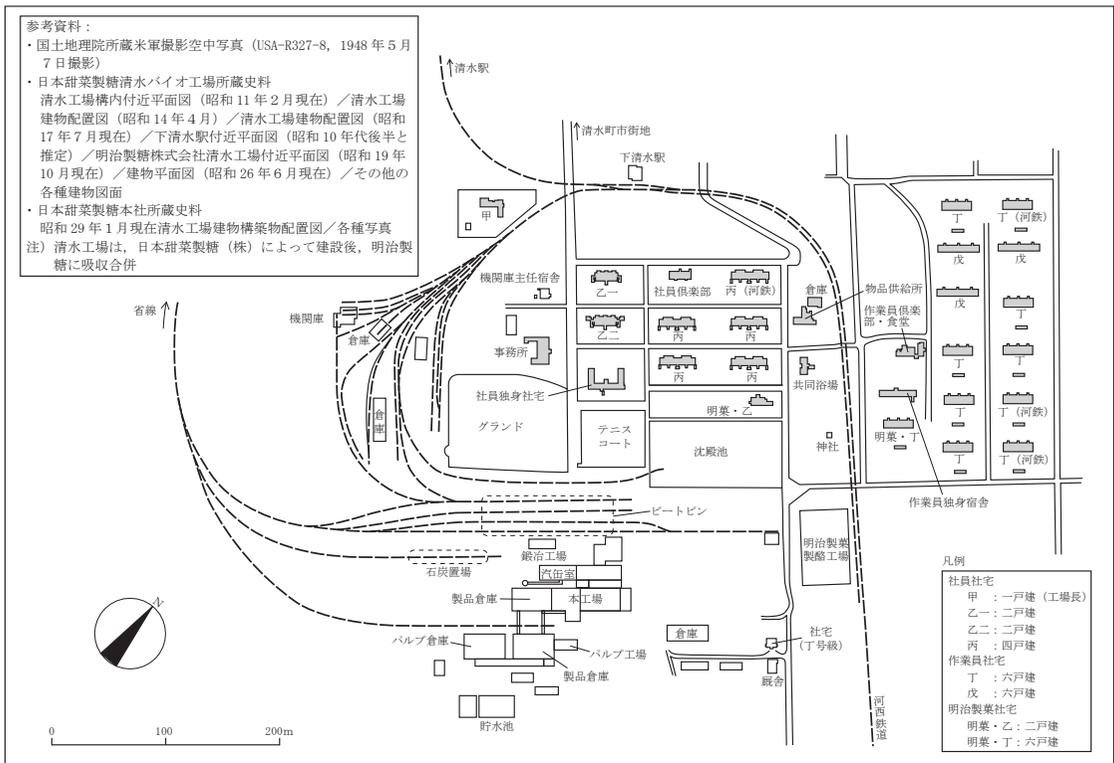


図2 明治製糖（株）清水工場の社宅街の復原図（昭和11年頃）

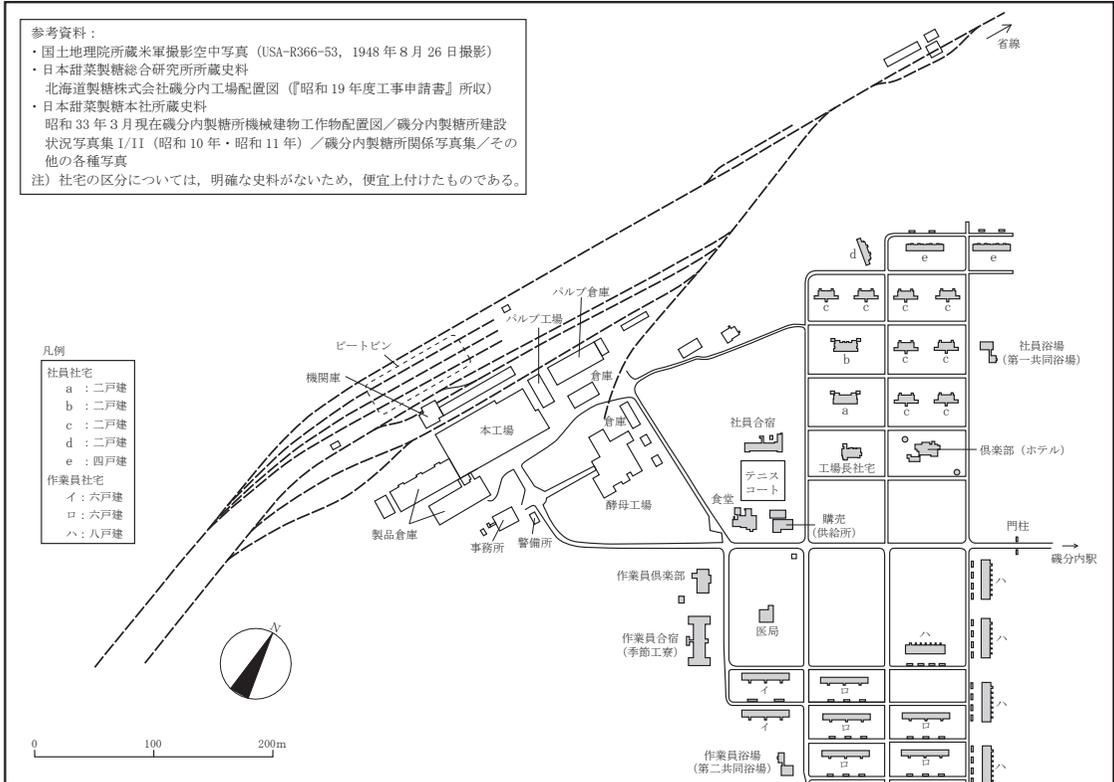


図3 北海道製糖（株）磯分内工場の社宅街の復原図（昭和19年頃）

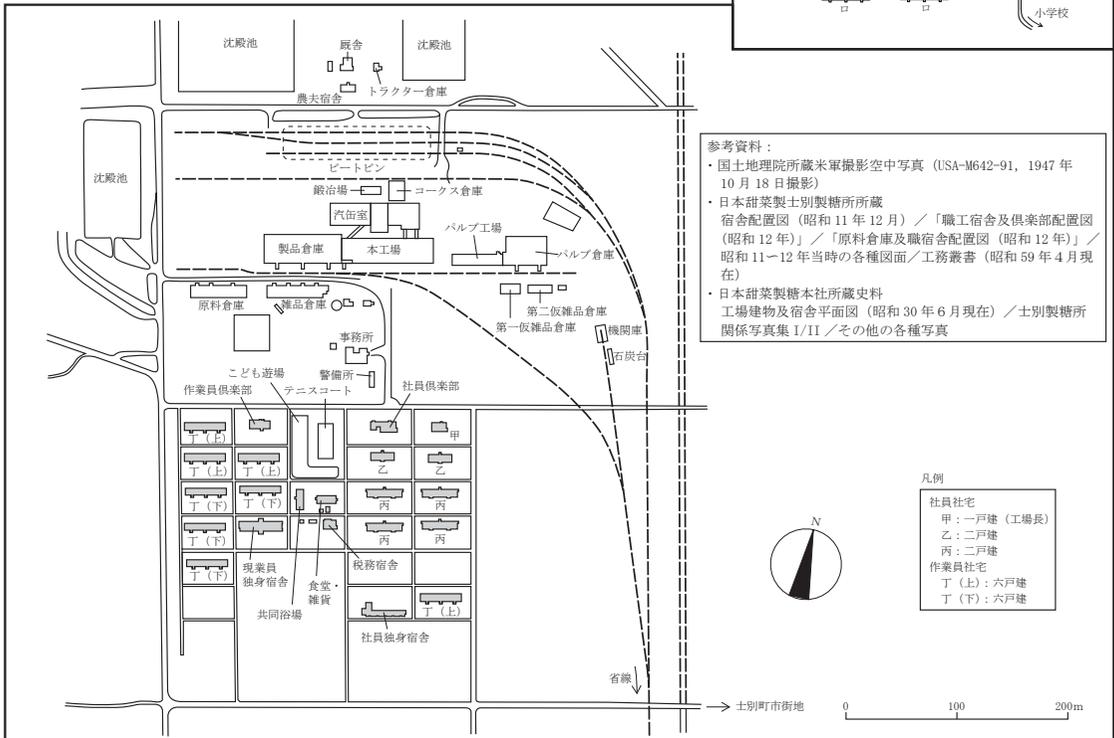


図4 明治製糖（株）士別工場の社宅街の復原図（昭和12年頃）

(3) 北海道製糖磯分内工場

現在の標茶町字熊牛原野にあった磯分内工場は、昭和10(1935)年10月に着工され、翌年12月には操業を開始した。工場の施工は銭高組であり、社宅やその他の施設についても銭高組の可能性が高い。なお、磯分内工場は昭和45年に閉鎖され、建物は解体された。2009年9月現在、社宅などの建物も残っていないが、区画割はほぼ残っていることが確認できた。

図3に昭和19年頃の社宅街の復原図を示す。省線磯分内駅へと続く道路の北側には社員用の社宅が、南側には作業員用の社宅が並んでいた(それぞれ、「北社宅」、「南社宅」と呼ばれた)。特筆すべきは医局の存在であり、工場の工事中の写真を見ても、かなり早い段階から建てられていた。当時の磯分内は、駅前に数戸しかない小さな集落でしかなく、標茶村全体でも医療体制は貧弱で¹²⁾、釧路までの交通の便を考えると必須の施設であったと考えられる。また、会社による整備ではないが、工場の建設に伴って、市街地の急速な発展、郵便局の開設、小学校の新築移転などがみられた¹²⁾。

(4) 明治製糖士別工場

士別工場は、当時の士別町が誘致の際に条件としたように、市街地に隣接する工場敷地143,171坪の寄附を受け、昭和10(1935)年7月に着工、翌年10月には操業を開始した。工場の設計と施工は清水組で、倉庫は阿部美樹志による設計である。社宅の設計は自社と考えられ、施工は大野組(士別町)と鶴間組(旭川市)であった。2009年9月現在も製糖を行っており、工場の建物の一部は当時のものが残っている。

図4に昭和12年頃の社宅街の復原図を示す。社宅街の西側に社員用の社宅が、東側に作業員用の社宅が並んでいた。磯分内と異なり、士別の場合には工場創立時には既にある程度の市街地が形成されており、いくつかの医療機関もあった¹³⁾ので、それらの利用を考えたためか、配給所は小さく、医局は設置されなかった。

4. 戦前期の北海道における製糖工場の社宅街の比較

会社別では、①北糖では社宅街の区画を工場に正対させないが、明糖は正対させる、②北糖では社員用社宅と作業員社宅の区画を比較的離すが、明糖は隣接さ

せる、③北糖では既成の市街地に隣接していないが、明糖は隣接させる、などの違いがみられる。

建設時期別では、後に建設された磯分内や士別では、集荷に省線を用い、省線からの引き込み線のみを設けた。帯広と清水では、甜菜の集荷のために十勝鉄道と河西鉄道を設立しており、鉄道が社宅街と周辺の地区の発展に与えた影響についても、検討する必要がある。

また、南洋群島や南大東島の社宅街よりも、全体の社宅数に比べて独身者や季節工用の寮の割合が多い。砂糖黍は刈り取った直後に圧搾が必要であるが、甜菜は貯蔵後の圧搾が可能であるため、原料の相違が社宅街の形成にも影響を与えている可能性がある。

5. まとめと今後の課題

本稿では、旧植民地諸地域を含む日本における製糖工場とそれを取り巻く社宅街の建設の過程を明らかにするための一環として、戦前期の北海道における4ヶ所の製糖工場の社宅街の復原図を作成し、比較した。

今後は、北海道と関連が深い樺太、同じ甜菜を用いた満洲や朝鮮、甘蔗を用いた製糖で、戦前期最大の生産量を誇った台湾についても調査を行い、報告したい。

謝辞 資料収集と現地調査では、日本甜菜製糖株式会社の関係者の方々、特に田高滋子氏に、また、帯広市史専門委員の井上壽氏にお世話になった。本稿は、平成21年度科研費(若手研究(B)、課題番号20760430)(基盤研究(C)、課題番号20560598)によった。

参考文献・引用文献・脚注

- 1) 詳細は、「その1」(辻原ほか、日本建築学会九州支部研究報告、第48号・3[計画系]、pp.693~696、2009.3.)を参照。
- 2) 辻原万規彦:南洋群島/熱帯気候下の住宅、社宅街 企業が育んだ住宅地(社宅研究会編著)、学芸出版社、pp.217~230、2009.5
- 3) 角哲:近代日本における工業系企業社宅街の形成、北海道大学博士学位論文、2004.2
- 4) 橋口弘:日本糖業史、味燈書屋、1956.10
- 5) 日本甜菜製糖社史編集委員会編:日本甜菜製糖四十年史、日本甜菜製糖、1961.7
- 6) 当時の工場の設計図(日本甜菜製糖ビート資料館所蔵)は、Dyer社によるもので、英語で書かれているが、社宅などの図面は日本語で書かれており、工場以外はDyer社の設計とは考えにくい。
- 7) 入手できた史料を用いて復原可能な最も古い時期のものを復原した。4工場の社宅街の復原時期が異なるのはそのためである。
- 8) 帯広の市街地にも、小さいながらも、本社に勤務する社員用の社宅街もあったが、今回は復原できていない。
- 9) 帯広市史編集委員会編:川西村史、帯広市役所、1964.11
- 10) 清水町史編さん委員会編:清水町百年史、清水町、2005.2
- 11) 北海道製糖と日本甜菜製糖の重役陣には、両者の取締役を兼任していた者がいた影響と言われているが、現在の清水工場所蔵の図面は、帯広製糖所の図面とほぼ同じものである。また、社宅も共通の図面を使用していたと考えられる。
- 12) 標茶町史編さん委員会編:標茶町史 通史編 第二巻、2002.3
- 13) 木村伊三郎編:士別市史、士別市、1969.7

*1: 熊本県立大学環境共生学部 准教授・博士(工学)

*2: 秋田工業高等専門学校環境都市工学科 准教授・博士(工学)

*3: アトリエ イマージュ

*4: 熊本県立大学環境共生学部 助手・修士(環境共生学)

Assoc. Prof., Prefectural University of Kumamoto, Dr. Eng.
Assoc. Prof., Akita National College of Technology, Dr. Eng.
Atelier Image
Assistant, Prefectural University of Kumamoto, M. ESS